

ヨハネによる福音書3章1-21節 「教師以上の方」

1A 御霊による新生 1-8

1B 神から来られた教師 1-2

2B 肉の誕生とは別の誕生 3-8

2A 人の子にある永遠の命 9-15

1B 信じないイスラエルの教師 9-12

2B モーセの青銅の蛇 13-15

3A 光のところに来ない人々 16-21

1B 世を愛される神 16

2B 救い主を拒む者たち 17-21

本文

ヨハネによる福音書3章に入ります。私たちは前回、イエス様がエルサレムの神殿で宮清めを行われた後に、エルサレムで数々のしるしを行われました。そして、彼らはイエス様を信じた、と言っていますが、興味深いことにイエス様は彼らを信じていませんでした。「2:24-25 しかし、イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった。すべての人を知っていたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。」私たち人間であれば、人が「私はイエス様を信じています」と言われても、その心にあるものは、測り知ることはできません。けれども、イエス様は知っておられました。ですから、相手が安易に、イエス様を尊び、信じているかのような発言をしても、主は、その人の心にあることに、おそらくは本人も分かっていないことでしょう、その心の深みにあることに語りかけていかれます。その筆頭が、これから出てくるニコデモです。その後で、4章でサマリアの女がいて、その後でガリラヤにいる王室の役人が出てきます。それぞれの心の内にあるものが、イエス様の真理の言葉によって、明らかにされていきます。

1A 御霊による新生 1-8

1B 神から来られた教師 1-2

1 さて、パリサイ人の一人で、ニコデモという名の人があった。ユダヤ人の議員であった。2 この人が、夜、イエスのもとに来て言った。「先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなされているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」

ニコデモという人物の紹介から使徒ヨハネは始めています。まずは、「パリサイ人」であります。これまでも説明しましたように、ユダヤ教のパリサイ派は最も広範囲に人々に認められていた宗派

であり、聖書を信じ、口伝律法も信じ、死者の復活や天使も信じていました。使徒ヨハネは、1章にて、バプテスマのヨハネのところに、「あなたは誰か？」と問いたすためにエルサレムから遣わしたのは、パリサイ派だったと書いてあります(1:24)。そして、「ユダヤ人の議員」です。ローマの支配の中にありながら、ユダヤ人たちは宗教指導者たちの集まる議会がありました。サンヘドリンと言いますが、彼はその議員でもありました。そして彼は4節で自分が老いていると言っています。つまり、彼は当時のユダヤ教において、最高峰であったと言えます。

その彼が、30歳そここのイエスに対して、「先生」すなわち「ラビ」と呼びかけて敬意を表しています。そして、誠実にイエス様のなされたしるしを受け入れているのです。「神のもとから来られた教師」であり、「神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません。」と素直に認めているのです。他の福音書では、イエス様が悪霊どもを追い出しているのことに、パリサイ人たちが「悪霊どものかしらベルゼベルによることだ。(マタ 12:24)」として、それに聖霊に対する冒涇だとイエス様は言われていました。そうした彼らに比べると、はるかに公平に、主のなされていたことを観察していたわけです。

ですから、人格的にも、とても誠実な人に見受けられます。神の国に入るのに、彼が入れなかったら、誰が入れるのか？と思わされます。自分が救われることができるのか？と考えるときに、大抵、こういった基準を自分に課していますね。自分は、聖書をそんなに知らないのに救われるのか？自分は、クリスチャン家庭でもなく、教会とは無縁だった、救われるのか？自分の性格は相当悪なのに、教会の仲間に入ったら、やばいのではないか？そういった不安を裏返すと、ニコデモのような人こそ神の国に入れるということになりますね。でも、イエス様は、もっともっと心の深い部分のところから、真理を語っていかれるのです。

ところで、ここで使徒ヨハネの意味深な付け加えがあります、「夜」です。これは、パリサイ派にしても、サンヘドリンにしても、公にはイエスに対しては敵対的態度を見せていきます。ですから、その空気を感じ取ってでしょうか、彼は公に見えないようにしてイエス様に近づいたのです。けれども、ヨハネの福音書には、「夜」が出てくると、それは暗闇のことであり、暗闇は罪の中、悪の中、真理から盲目にされている状態を指していることが多いです。ですからニコデモが、これだけ誠実であるにもかかわらず、未だ闇の中にいるということも暗示しています。

2B 肉の誕生とは別の誕生 3-8

3 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

イエス様は、「まことに、まことに」という言葉から始められます。これは、ギリシア語では「アーメン、アーメン」となっています。イエス様が、「恵みとまことに満ちておられた(1:14)」と紹介されて

いたことを思い出してください。恵みとまことが一対になっていることが大切です。神の恵みの中に生きるとは、自分のありのままの姿、自分についての本当の姿が明らかにされなければ、恵みの中に生きられません。自分が、どれほど神の好意を受けるのに、かけ離れてるのか知らなければ、恵みを知ることはできないのです。恵みとは、「自分の受けるに値しない祝福を、受ける」ことを意味します。自分が何でもないので、自分は神から呪われてもしかたがないのに、むしろ神は好意を持っておられて、祝福してくださるということです。

そして、「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」という有名な言葉を語られます。ユダヤ人であれば、神の国に入るということを、パリサイ派は普通に信じていました。メシアが来られて、神の国を地上に立てて、ユダヤ人はそこで神の祝宴にあずかることができると信じていました。ところが、「新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」とはつきりと、言われるのです。ちなみに、ここの「新しい」という日本語訳は、「上から」とも訳することができます。上から、というのは、天からであり、神からであります。人が地上で生まれるけれども、新たに天から、神から、生まれなければいけないということです。

4 ニコデモはイエスに言った。「人は、老いていながら、どうやって生まれることができますか。もう一度、母の胎に入って生まれることなどできるでしょうか。」

ユダヤ教徒にとって「新しく生まれる」とは、主に、異邦人が改宗することでした。ですから、ユダヤ人であり、すでにユダヤ教徒である自分に対してこの言葉をイエス様がお使いになったので、ニコデモはうろたえました。もう一度、母の胎内に入って、人生をやり直さないといけないことですか？と尋ねているのです。これまで、どんなに努力して、経験を積んで、そして今も神に仕えているとされるニコデモが、「あなた、死なないと直らないよ」とイエス様は言われているのです。しばしば、救いについて喩えますが、それは川を上流に向かって進んでいる船のようなものです。しかし、その川はナイアガラの滝にぶつかってしまい、もう先には絶対に進めない状況です。

5 イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに言います。人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません。6 肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。

イエス様はさらに、「まことに、まことに、あなたに言います。」とされています。さらに突っ込んで、新しく生まれることについて、その真理を語っておられます。ここで、主が言われているのは、「肉による誕生」と「霊の誕生」の二つがあるということです。そして地上においては、肉の誕生があるが、神から、天からの霊の誕生も経なければ、神の国に入ることはできないということです。「水と御霊によって」と言われていますが、ここでの水は「肉」と同義です。イエス様は、言い方を変えているだけで、同じことを話されています。

ユダヤ人が水の中に入る浸礼があります。神殿で宮参りをする前などに、ミクバと呼ばれる浸礼槽に入ります。階段があり、一つは下るためのもの、もう一つは上るためのものです。そして、下る時に自分の来ている白い衣を脱ぎ、全身裸で頭のとっぺんも浸かるかたちで入っていきます。それは、母親の胎内にある羊水を示しています。つまり、母の胎内に入ることを意味するのです。これが新たに生まれることを示して、異邦人が救われるためにユダヤ教に改宗する時は必ずそれを行ったし、そのほかの重要な儀式に関わる時に、ユダヤ人はミクバに入りました。

イエス様は、しかしここで、ユダヤ人として母の胎内から生まれるだけでは足りないのだ、と言われていたのです。神の御霊によっても生まれなければいけないのだと言われていたのです。ここで大事なのは、人がどのようにして造られたか？ということです。「創 2:7 神である【主】は、その大地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」神は人を造られる時に、肉体のみによって造られたのではありません。土の成分と、人体の成分はここにあるように同じです。しかし、神は鼻に息のいのちの息を吹き込まれました。息も、風も、ヘブル語では霊と同じルアクが使われます。神の霊が人に吹き込まれて、それで生きるものとなりました。それなので、人は肉と霊を持って造られました。さらに詳しく話すと、「魂」もあり、それは今でいうと精神のような部分です。知情意と呼ばれる部分です。

神は、父、子、そして聖霊がおられ、しかし三つの神ではなく、唯一の方です。三位一体の神です。子が父を表し、父と子が聖霊を遣わし、人に関わられます。その神の霊によって、人は生きるものとなり、人の霊は神の御霊につながっていることによって、本当の意味で生きます。神は肉においても祝福されます。人が何かを食べたいという思いも、祝福されます。また女の人とつながりたい、あるいは男の人とつながりたいという思いは、結婚という制度によって豊かに祝福されます。それらは、神の御霊の支配を受けていることによって、そうした肉にある望みも神の栄光のために用いられます。しかし、アダムは神の命令に違反しました。食べてはいけないと命じられていた、善悪の木の実から取って食べました。それで神から離れました。神の霊から離れているので、人の霊は死んでしまっています。ちょうど、コンセントに電源が入っていない電気器具が死んでいるのと同じであるように、人も肉体として存在していても、神につながっていなければ死んだも同然なのです。そして、自分の思いは、霊ではなく肉に支配されます。何を食べるか、どこに住むか、何を着るか？ということもいつも思っています。また、神の命令の中で肉の望みを果たすのではなく、神を度外視して、肉の欲望を満たそうとします。

そこで、イエス様は、「御霊によって生まれた者は霊です。」と言われたのです。人がイエスの名信じて、神の御霊によって生まれるのです。言い換えれば、人の霊が神の御霊に結び付き、それによって神の命が私たちに再び注ぎ込まれるのです。すると、これまで肉の欲求のことばかり考えていた人が、神を喜ばせたいと願うようになり、思いは神のことに向けられるのです。

7 あなたがたは新しく生まれなければならない、とわたしが言ったことを不思議に思っはなりません。8 風は思いのままに吹きます。その音を聞いても、それがどこから来てどこへ行くのか分かりません。御霊によって生まれた者もみな、それと同じです。」

おそらく、ニコデモは、何を言っているのかわからないというような、怪訝な表情をしていたのでしよう。「不思議に思っはなりません」と言われています。ところで興味深いことに、イエス様はニコデモに対して、「あなたがたは」と言われていますね。それはニコデモが、2 節で「私たちは」と言っていることに呼応しておられるからです。サンヘドリンの代表であるかのようにニコデモがやってきたので、イエス様も彼だけでなく、彼の後ろにいるサンヘドリンの人たちにも語っておられるのです。

風についてイエス様は語っておられます。これはヘブル語が、先ほど話したように、風と息と、霊は同じ言葉が使われているからです。風の現象を見てください、風そのものを肉眼で見ることできません。けれども、風の存在を疑う人はいませんね。それは、風によって影響を受ける、目に見えるものがあるからです。同じように、御霊によって生まれるということも、それ自体は目に見えませんが、その人が変わることによって、御霊がその人を新しく造られたのだとよくわかるのです。

2A 人の子にある永遠の命 9-15

1B 信じないイスラエルの教師 9-12

9 ニコデモは答えた。「どうして、そのようなことがあり得るでしょうか。」10 イエスは答えられた。「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からないのですか。」

ここに、ついにニコデモの心が表れました。「どうして、そのようなことがあり得るでしょうか。」とのことです。ニコデモにとって、「新しく生まれる」ということさえ、ミクバに入るとい、目に見えることだけの意味になっていました。パリサイ派は、霊も天使も、復活も信じているはずですが、けれども、信じていなかったのです。真理であられるイエス様と対話したことによって、彼の心にあることが露わになったのです。金持ちの青年もそうでしたね、とても誠実にイエス様に近づきましたが、最後は、自分の財産を手放すことができない、つまり神ではなく、金をもっと大事にしていたことが露わになったのです。

イエス様は、「あなたはイスラエルの教師なのに、そのことが分からないのですか。」と言われます。イスラエルの教師であれば、聖書に精通しているはずですが、そこには、神の霊について多くが語られています。そして具体的には、神がご自身の御霊をイスラエルの民に注がれて、彼らの心が一新されることが、エゼキエル 36 章で預言されていたのです。「エゼ 36:26-27 あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」ちなみに、37 章には、風によって、イスラエ

ルの民が、息をもった一人の人のようになることが預言されています。風と霊が同じ言葉なので、風の話イエス様がしたら、そこで御霊の話の思い出してもおかしくないはずなのです。

11 まことに、まことに、あなたに言います。わたしたちは知っていることを話し、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れません。12 わたしはあなたがたに地上のことを話しましたが、あなたがたは信じません。それなら、天上のことを話して、どうして信じるでしょうか。

ここでイエス様が、「わたしたち」と言われているのは、父なる神とご自身、御霊、さらには神に啓示を受けたバプテスマのヨハネも入れていることでしょう。知っていること、見たことを話していると言われますが、人であるバプテスマのヨハネも、「1:32 御霊が鳩のように天から降って、この方の上にとどまるのを私は見ました。」と言って証言していました。ニコデモの問題は、信じられないのではなく、受け入れない、拒んでいるということだったのです。「わたしたちの証しを受け入れません」と主は言われます。多くの人が、「～できない」という言葉で、「～は、しません」という意志表明をすることがあります。できないのではなく、しないのです。できないのではなく、受け入れないという選択をしているのです。

そして、地上のことを語られているのに、天上のことを話したとて信じるでしょうか？とイエス様は言われていますが、そうですね、イエス様は風という、地上の現象を使って、御霊によって新しく生まれることを語られました。それでも受け入れないのです。私たちは、聖書を知っているという言葉で、結構、だまされます。その人が本当に聖書を知っているのかどうか、本当には分からないものです。イエス様は、すべての人の心を知っておられる方なのです。

2B モーセの青銅の蛇 13-15

13 だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。

ここに、宗教とキリストについての根本的な違いが語られています。天というのは、神の住まわれる所です。天に上るとは、神に到達するということです。かつてバベルの塔で、天に届こうとしたけれども、神が言葉を混乱させられました。有限の人間が、無限の神に近づくことはできないのです。しかし、宗教とは天に上ろうとする試みそのものです。仏教は、修行によって涅槃を悟ろうとしています。イスラム教はアッラーの戒律を守ることによって救われようとしています。そしてキリスト教においてさえ、いかがでしょうか、自分の頑張り神に近づこうとしていないでしょうか？どれだけ祈ったのか？どれだけ聖書を読んだのか？どれだけ教会で熱心に仕えているのか？いつの間にか教会での活動を、自分が神に到達するための手段に変えてしまうのです。

しかし、「天から下って来た者、人の子」であります。神が肉体を取って、私たちの間に住まわれ

る方です。人の子とは、単に人間を示す言葉でもありますが、ダニエル 7 章にはキリストを指す呼び名としても使われています。イエス様は、キリストが天から降ってこられた方として語っておられるのです。

14 モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません。15 それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

イスラエルの教師であるニコデモに対して、聖書から語られます。弟子として呼ばれたナタナエルに対しても、ヤコブの見た、天からの梯子の夢を語られましたね。同じように、今ここでは、モーセが青銅の蛇を作り、それを旗竿に付けた時のことを思い起こさせています。

民数記 21 章 4-9 節をお読みします。「4 彼らはホル山から、エドムの地を迂回しようとして、葦の海の道に旅立った。しかし民は、途中で我慢ができなくなり、5 神とモーセに逆らって言った。「なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。われわれはこのみじめな食べ物に飽き飽きしている。」6 そこで【主】は民の中に燃える蛇を送られた。蛇は民にかみついたので、イスラエルのうちの多くの者が死んだ。7 民はモーセのところに来て言った。「私たちは【主】とあなたを非難したりして、罪を犯しました。どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう【主】に祈ってください。」モーセは民のために祈った。8 すると【主】はモーセに言われた。「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる。」9 モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上に付けた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぎ見ると生きた。」

燃える蛇にかまれて死んでいくイスラエルの姿は、罪の中に死んでいる私たち人間の姿を示しています。先ほど話したように、神から離れて霊が死んでいるのです。けれども、神は、人が滅びるのを喜んでおられません。それで、彼らが生きることができるような道を備えられたのです。それがこの青銅の蛇の中に象徴としてあります。青銅は聖書の中では、神のさばきの象徴となっています。例えば、犠牲の動物がほふられて、燃やされる場所である祭壇は、青銅で出来ていました。そして、蛇は罪を象徴しています。エバを惑わして、アダムに罪を犯させたのは、あの蛇です。これが旗ざおの上につけられていたことは、木の上で罪が神によってさばかれたことを意味します。つまり、これは十字架の上に死なれたイエス・キリストの姿を示していたのです。イエス様は、「人の子も上げられなければなりません。」と言われましたが、これは後に十字架につけられることを意味しておられたのです。

けれども、ただイエス様が十字架につけられただけでは、人は新たに生まれることはできません。イスラエルの民が青銅の蛇を見て、生きたように、私たちも十字架につけられたイエスを見なければいけません。イエスが死なれたのは、自分の罪のためなのだと信じなければならないので

す。そこで、イエスは、「信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」と言われました。ですから、「どのようにして、そのようなことがありうるのでしょうか。」という質問に対しては、「イエスを信じることによってありうるのです。」という答えなのです。

3A 光のところに來ない人々 16-21

1B 世を愛される神 16

16 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

ここは、続けてイエス様の言葉であるとも考えられるし、使徒ヨハネの注釈とも考えられます。新改訳ではヨハネの注釈のようにして訳されていますが、イエス様ご自身の言葉かもしれません。いずれにしても、ここから主は、どれほど神が反抗する人々を愛してやまず、滅びから救いたいと願われているかを語られます。そして、どんなに人間が頑なになってしまっ、自ら滅びを招く道を選んでしまっているかも語っておられます。神の愛について、午前礼拝ではここだけを選んで、詳しく語らせていただきました、ぜひお聞きください。

2B 救い主を拒む者たち 17-21

17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

16 節があまりにも有名なので、その箇所だけで考えてしまいがちですが、16 節の続きで 17 節があり、16 節はその一部になっています。神は世を愛され、御子を遣わしてくださいました。その思いは、御子が自分を救ってくださいと信じ、拠り頼む者がだれ一人として滅びないためです。そして、御子にあって永遠の命を得るためです。

ですから、世を裁くために來られたのではありません。救うために來られたのです。しかし、イエスが來られたことについて、あまりにも多くの方が裁かれるために來たと思ひ込みます。それは、自分自身に罪があるので、イエスという方を知ると怖いと思うのです。その聖さと正しさに触れて、恐ろしい方だと思ふのです。しかし、イエス様はご自身が十字架に付けられることによって、神が自分を罰するのではなく、御子にあって罪を帳消しにしたいと願われていることを知ります。救うために來られたのです。ですから、信仰が必要なのです。どういう信仰か？というと、その救いの御手を救いの御手だと信じることです。裁きの手なのだと思ひ込んで、その手を握らない人があまりにも多いのです。ヨハネ 8 章における、姦淫の現場で捕らえられた女の人に語られたイエス様の言葉を思い出しましょう、「8:11 わたしもあなたにさばきを下さない。行きなさい。これからは、決して罪を犯してはいけません。」パウロはローマ 8 章 1 節で、こう言っています。「今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

まだイエス様を信じていない人だけでなく、信じているとされる人たちまでが、御子は世をさばくために来たとしていることがあります。人々がイエス様を信じていないと、罪を赦し、義と認め、永遠のいのちを与えたいと願われている神の心ではなく、あなたは地獄行きなのだとして、それを伝えるのが自分の使命であるかのように考えている人々もいます。そういった人々は、自分が果たして、神の愛に留まっているのか、むしろ自己吟味する必要があるでしょう。真実な悔い改めは、自分が地獄に行くから、それが怖いから、というような生半可なものではありません。悔い改めというのは、もっともっと深いところから出てきます。

18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者はすでにさばかれている。神のひとり子の名を信じなかったからである。

ここでイエス様、あるいはヨハネは、はっきりと、信じていないことによって、「すでにさばかれている」状態なのだ、と言っています。私たちが普通に考えるような裁きではないことが、ここで分かります。私たちが裁きだと思ってないところに、すでに裁きがあるのだと言っているのです。それは、イエスの名にある罪の赦し、神の御霊による新生を知らない、神の愛を知らないということ自体がすでに、神の裁きなのだということです。

19 そのさばきとは、光が世に来ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。20 悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。

ここは、主にある恵みとまことを知るのに、とても大切な箇所です。恵みというのは、先に申し上げたように、自分自身が露わにされることが前提となっています。光が世に来ていて、その光に照らされて、自分自身のありのままの姿が明らかにされるということなのです。私が聖書についての本を初めて手にしたのは中学生の時です。姉がミッション系の中学校に通っていて、そこでキリスト教概論のような授業があったので、岩波ジュニア新書から出版された聖書物語のような本でした。聖書なるもの、いったい何なのだろうと思って少し読み始めました。アダムが罪を犯し、カインが弟アベルを殺し、世界中の人々が悪に傾いて、ノアの時代洪水が起こって、そういった話を読んでいて、「聖書って、文部省の教科書検定で合格しないだろうな。」と思ったのです。まるで、週刊誌か何かの、赤裸々な痴話のように見えていました。

しかし、そんな恥ずかしいことだらけの人間であるのに、なおも彼らに付き合っている神の活動が書いているのです。これにも驚きました。当の昔に見捨てたってかまわないのに、問題だらけの人間に付き合っていたら、自分にその問題が降りかかってきますし。ごめんなさい、ちょっと下品な言い方をすると、糞を踏んだら糞まみれになりますね！でも、聖書は、神がキリストにおいて、糞である人間に近づいてしまったから、糞まみれになった、つまりローマの十字架に付けられたとい

う話になっているのです。しかし、これが神の恵みなのです。受けるに値しない祝福を、受けることができるようにしておられる、神の一方的な好意、愛が恵みなのです。

ですから、ここでいう裁きというのは、こういうことなのです。自分の行いが悪いことが、光であるイエス様が来られることによって見えてきてしまいます。ところが、そのように自分の闇の部分は明らかにしたくないので、近づこうとしないのです。こうやって、自分を偽りの中に置いてしまうのです。自分はそれほど悪くない、正しい。そうやって自分の行いによって、正しさを証明しようとしてしまいます。自分自身の本当の姿を、自分のしていることで覆い隠してしまいます。これを行ってしまったのが、いわゆる当時のユダヤ教のパリサイ派の人たちであり、イエス様がその偽善を責められたのですが、パリサイ派のみならず、人間であればそれをやってしまうし、そしてキリスト者と自分を言っている、イエスへの信仰が実は宗教になってしまっていることが多いのです。

21 しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。

先ほど、「真実な悔い改めは、自分が地獄に行くから、それが怖いから、というような生半可なものではない」と言いました。その回答がここにあります。真理を行う、というのは、光であるイエスのところに来る、ということは、来ることさえが神になされたことが明らかになる形でそうなのだ、ということです。自分がいかに自分の罪が明らかされて、自分が悔い改めて、神に立ち返ったのだと、意識することができないほど、それ自体が神のなされたことだとしか思えないほど、そして事実、神がなしてくださったのですが、光の方に来ることができたのです。人が悔い改めたことを見るときに、そこに、「彼というよりも、神が彼の中におられる」と人々が認めることができます。

私たちが何かを行ったから救われたのではなく、キリストにある神の愛をして、その愛に応答することによって救われます。あくまでも応答であって、主体は神が、御子をお与えになったところにある備えが主体なのです。パウロが上手に、エペソ人への手紙で話しています。新改訳 2017 も、上手に訳しました。「エペソ 2:8-9 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることもないためです。」この恵みのゆえに、ということが中心です。その恵みの中で、信仰によって救われます。どうか、勇気を出して、自分のありのままの姿、それが惨めでどうしようもないのかもしれないかもしれませんが、しかし、ありのままの姿で来てください。そのすべてを知っていながらにして、いや神は、あなたが知っている恥以上のものをすべて知っておられて、なおのこと愛しておられます。その愛の中に飛び込んでください。